

The Gaskell Society of Japan

Newsletter

日本ギaskell協会ニューズレター

ギaskellの『シャーロット・ブロンテの生涯』と ジェイン・オースティンの伝記のこと

直野 裕子
(甲南女子大学名誉教授)

シャーロットの死後2年も経たないうちに『シャーロット・ブロンテの生涯』(1857、以下『生涯』と略す)は出版されたが、ジェイン・オースティンの伝記は、1817年彼女が亡くなった後出版された『ノーサンガー・アベイ』と『説得』の合本(1818)に付された兄ヘンリーの簡単な作者紹介以外、甥(長兄の長男)J. E. オースティン・リーによる『ジェイン・オースティンの思い出』(1870、以下『思い出』と略す)の出版までまったく書かれなかった。

シャーロットをヒロインとした小説を書きたいというギaskellの思いは『ジェイン・エア』出版以来、早くから芽生えており、彼女の死の2か月後、ギaskellは、将来、作家としての、また一人の女性としてのシャーロットについて書きたいとG. スミスに手紙で伝えるが、その半月後父親パトリックから伝記執筆を依頼され、その主目的はシャーロットを作家としてより家庭を大切にす慎ましく従順な女性、つまり家父長制のヴィクトリア朝において理想とされる女性に仕立てあげることになった。これに合わない事、たとえばシャーロットのエジェ氏への恋愛感情のことには触れずに、彼女の苦しみの主因は弟パトリックのことにあるとし、彼が破滅的生涯を終えたのは家庭教師先の夫人の不実のせいだと強い非難を夫人に向けた。この伝記は高く評価される一方、非難や抗議が続出し、相当に書き直されて第3版が出るが、関係者が亡くなると第3版ではなく初版が主流となる。

厳しい批判を受けながらも、この伝記がいまだに多くの読者の心を捉えるのは、シャーロットの手紙の引用が『生涯』の大半を占めていて、シャーロット自身に大いに自分を語らせているからであろう。ギaskellはできるだけ作者の存在が意識されないように語り手にも多くを語らせない。私たちはシャーロットの言葉の宝庫から、けっして自分の説を曲げない作家としてのシャーロットをも知ることができるのである。

G. H. ルイスが『ジェイン・エア』を好意的に評価しながら、メロドラマに陥らないようにと助言しオースティンの小説を読むよう勧めたのに対して、シャーロットはそうのように努力すると述べたうえで、周知のようにオースティンの小説を痛烈に批判する。(ルイス宛 1848年1月12日付)

当時の人気作家はスコットやブロンテ姉妹、ディッケンズ、サッカレーで、抑制のきいた複雑微妙な手法で描くオースティンの作品は、ルイスやオリファントなどには高く評価され、サウジーやコールリッジ、ディズレイリなどにも日記や手紙で個人的には称賛されるが、一般の読者にはほとんど読まれていなかった。シャーロットのオースティン批判が公表され、それに追随する批評も出て危機感を抱いたオースティン・リーは、叔母のことを次世代に伝えるのは自分以外にないと決心して、『思い出』の執筆にかかる。オースティンの生きていたジョージ王朝時代、特に摂政皇太子の時代はかなり自由な風潮であったが、彼は叔母が家族と一緒の居間の片隅で他人に知られないよう用心しながら作品を書き、'by a Lady'と匿名で出版し、名声も利益も求めず趣味として小説を書いたのだと強調し、これがオースティン神話となる。ブロンテ神話を生み出したギaskellと同じ手法でオースティンをヴィクトリア朝の価値観に基づいて理想化し、善良で慎ましい女性像に仕立て上げる。

オースティン・リーは、「ブロンテとオースティンほど異なる二人の作家はいない、ブロンテにはなぜオースティンが称賛されるのか理解できなかった」と見るが、「両者とも自己の自由な作風に対する干渉に抵抗した」と指摘し、それぞれの作風を顕著に示す、今ではよく知られている言葉を手紙から引用している。シャーロットの場合は上述と同じルイス宛の手紙から「作家が最高にうまく、少なくとも非常にすらすらと書いているとき、ある力が作家の中で目覚め作家を支配し……自分以外のすべての命令を無視し……注意深く苦心して作り上げた以前の考えを否定し、突然新しい考えを創造し採用するのです……私たちはこのような力に逆らうことができるでしょうか」(省略は筆者)

オースティンの場合は、当時の摂政皇太子の図書館長 J. S. クラークに、「コバーク王家の歴史を描く歴史ロマンス」を書くよう提案されての彼女の返信（1816 年 4 月 1 日付）から—「私には叙事詩と同様ロマンスを書く能力はありません……まじめなロマンスをまじめに書き続け自分や他人をけっして笑ってはならないのでしたら、第 1 章を書き終えないうちに絞首台に吊るされた方がいいと思うでしょう。私は自分流の方法で、自分自身の道を行かなければなりません。2 度と成功しないにしても、他の方法では完全に失敗すると確信しています」（省略は筆者）

伝記とは、その対象人物に対して、たとえ偏見に満ちたものであれ作者自身の強い思い入れがなければ成立しないものであろう。ギャスケルは「私は真実を書こうとした」と繰り返し弁明している。思わぬ批判や攻撃を受けることになるが、ギャスケルも彼女独自の作家魂に突き動かされて『生涯』を書いたに違いない。

◆◆◆新刊紹介（2015 年度）◆◆◆（掲載情報は 2016 年 3 月 15 日までに報告されたものです。）

市川千恵子（共著）、『ブロンテ姉妹と 15 人の男たちの肖像——作家をめぐる人間ドラマ』（ミネルヴァ書房）

日本ギャスケル協会（編）、『ギャスケル中・短編小説研究 没後 150 年記念』（大阪教育図書）

松岡光治（編著）、*Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell: Sesquicentennial Essays*. Osaka Kyoiku Toshō.

* 新刊書の情報を事務局（secretariat@gaskell.jp）までお寄せ下さい。締切は 2017 年 3 月 15 日です。

第 27 回例会レポート

日 時：平成 27 年 6 月 6 日（土）午後 2 時から

会 場：静岡市産学交流センター（ペガサート）

開会の辞：日本ギャスケル協会会長

鈴木 美津子（東北大学名誉教授）

研究発表：司会 波多野 葉子（元筑波学院大学教授）

1. 「トランスアトランティックにおけるギャスケルの受容と変容——ブーシコーのロング・ストライキ（1866）」
松浦 愛子（釧路公立大学准教授）

2. 「二人は何を見つめていたか——ギャスケルとブロンテの「眼差し」を考える」
杉村 藍（岡山県立大学教授）

講 演：司会 松岡 光治（名古屋大学教授）

「ギャスケルの「ジョンソン」——言語、語り、出版文化」原田 範行（東京女子大学教授）

閉会の辞：日本ギャスケル協会副会長 大島 一彦（早稲田大学教授）



（撮影：大野龍浩）

研究発表

1. 「トランスアトランティックにおけるギャスケルの受容と変容——

ブーシコーのロング・ストライキ（1866）」

本発表では、劇作家ディオン・ブーシコーによる翻案劇の米国公演の分析をつうじ、『メアリ・バートン』の米国における受容の事例を示した。

19 世紀中葉のニューヨークの劇場の観客は、様々な階級の集うロンドンの劇場とは異なり、急速に拡大する経済の中核を担う社会層が中心であった。一見些末な劇中の電報の場面は、技術の発展と国家の進展を同一視する米国のグランド・ナラティブと合致し、情報戦であった市民戦争直後の米国人の国家意識を高揚した。また、法律家による救済措置と資金援助が米国に根強いフィランソロフィー（慈善事業）文化に訴えるなど、わき役による演出が効果をあげ、劇の人気は英国を上回る結果をもたらした。

従来への批評において、当該劇は原作の政治的メッセージを骨抜きにした単なる娯楽とされた。しかしながら、米国においては市民戦争後に顕著となった階級格差を背景に、劇は当時の労働問題を刺激し、ストライキすら促すなどの社会的影響力を及ぼしたことに言及した。

最後に、19 世紀半ばの米国における当該劇の海賊版の存在から、ギャスケル研究におけるトランスアトランティックの必要性を示した。

（松浦 愛子）

2. 「二人は何を見つめていたか——ギaskellとブロンテの「眼差し」を考える」

19世紀には様々な視覚に関する発明品が誕生し、人々は「見る」ことをめぐる大きな変化を経験していた。『メアリ・パートン』とC・ブロンテの『教授』の比較を通し、この時代に活躍したギaskellの眼差しが何に向けられていたのかを考えてみた。

作家となる以前は画家になろうとしていたこともあるブロンテは、絵画に強い関心をもっていた。『教授』には美術用語を多用した表現や、当時科学として流行していた観相学や骨相学を援用した外見から内面に迫る人物描写など、視覚的な要素が多く見られる。一方『メアリ・パートン』では、メアリがその眼差しを何に向けるといふ対象の変化により彼女の肉体的な成長が示される。そして、当初この小説の主人公として想定されていたメアリの父、ジョン・パートンが“visionary”と呼ばれていることも重要である。この語がもつ「未来を見通す力のある者、預言者」という意味は、ジョンの、そして作者ギaskellの視線が、労使が対立する厳しい現実が改善されることを期待して、二人が生きた19世紀からさらに未来へと向けられていることを暗示しているように思われる。（杉村 藍）

講演：「ギaskellの「ジョンソン」——言語、語り、出版文化」

原田範行先生には祖母のいとこに大谷藤子という戦前から戦後にかけて活躍した作家がおられ、その方が『シャーロット・ブロンテ伝』を初めて訳した網野菊と昵懇だったそうです。その二人の写真がパワーポイントで投影された予期せぬ始まりから終わりまで、先生の御講演は聴衆を惹きつける魅力的なものでした。そこに一貫して見られたのは、常識や定説に対しても独自の視点で捉えて新しい解釈を提示し、それを傍証によって実証しようとする姿勢です。例えば、『克蘭フォード』第1章におけるミス・ジェンキンズのジョンソン博士擁護とブラウン大尉のディケンズ支持という文学談義は文学的潮流の新旧交代とされていますが、先生は「ジョンソン博士の文体は若い初心者模範である」というミス・ジェンキンズに言葉に注目され、ギaskellが「ジョンソン風に書いてみるから大きな声で朗読してみてね」と義妹に書いた手紙の軽い調子から、「旧来の伝統や価値を振りかざす権威としてのジョンソンではなく、もう少し親しみのある好々爺然としたジョンソンの姿」を読み取られました。御講演は『ギaskell論集』に掲載されますので、詳しくはそちらで追体験なさってください。（文責 松岡 光治）

「例会に参加して」

第27回例会は、2015年6月6日（土）、静岡市産学交流センターにて開催された。前日は雨が降っていたが、会当日は晴れており気持ちよく静岡へと赴いた。東北大学名誉教授鈴木美津子会長の開会の辞で開会し、氏によると、日本ギaskell協会の催しが静岡で開催されるのは初とのことであった。

まず波多野葉子元筑波学院大学教授の司会で研究発表が行われた。第一発表者の松浦愛子釧路公立大学准教授の研究発表は、『メアリ・パートン』をもとに書かれた『ロング・ストライキ』のイギリスとアメリカでの受容の差に関してであった。ロンドンとブロードウェイでの客層の違いや、そこから生じる劇場内の雰囲気の違い、また英米間の電報に対する意識の相違等、当時の詳細な文化背景からのアプローチが大変興味深かった。

第二発表者の杉村藍名古屋女子大学短期大学部教授は、「見る」ことに敏感であったヴィクトリア朝の時代風潮の中で、シャーロット・ブロンテの『教授』とギaskellの『メアリ・パートン』における描写方法の差に着目された。たとえば、シャーロットは外見から内面を見ようとする傾向があるため、登場人物の外見の細かな描写があるのに対して、ギaskellにはそれが見られない等、比較により改めて各作家の特徴が浮き彫りになる刺激性的な内容であった。

休憩後、松岡光治名古屋大学教授の司会のもと、原田範行東京女子大学教授の講演が行われた。『克蘭フォード』第1章を中心に、ギaskellが『ラセラス』から受けた語りの技法面での影響に関する考察に多くのことをご教授いただいた。『虚栄の市』の挿絵に描かれたベッキー・シャープが投げ捨てるジョンソンの辞書はどのような類の辞書であったのか、『克蘭フォード』でミス・ジェンキンズが朗読したのは『ラセラス』第何章だったのか、当時リーズで刊行されたという珍しい『ラセラス』の現物の紹介等、次々と興味が尽きないお話に魅了され、あっという間の1時間であった。

早稲田大学教授大島一彦副会長の閉会の辞で本年度の例会は無事に終了した。

会終了後は場所を移動し、クポール会館にて懇親会が開かれた。円卓を囲み、和気あいあいとギaskellの話題を中心に21名が更なる親睦を深め有意義な半日は終わった。

本年度の例会には28名の方にご出席いただいた。例会開催に当たりご準備等お世話頂いたすべての先生方に深謝申し上げる。（近畿大学非常勤講師 瀧川 宏樹）

第 27 回大会レポート

日 時：平成 27 年 10 月 3 日（土）午後 1 時より

会 場：名古屋大学東山キャンパス文系総合館 7 階
カンファレンスホール

開会の辞：日本ギaskell協会会長 鈴木 美津子
（東北大学名誉教授）

シンポジウム：
「ギaskell中・短編小説の魅力 ——
『没後 150 周年記念論文集』を語る」

司会・講師 大野 龍浩（熊本大学教授）
講師 市川千恵子（茨城大学准教授）
石塚 裕子（神戸大学教授）
桐山 恵子（和歌山大学准教授）
鈴木美津子（東北大学名誉教授）
西垣 佐理（近畿大学専任講師）
足立万寿子（元ノートルダム清心女子大学教授）

総 会：総合司会 事務局長 市川千恵子（茨城大学准教授）

講 演：司会 芦澤久江（静岡英和学院大学短期大学部教授）
「Press-gang をめぐって：Mrs Gaskell と Mr Hardy」 深澤 俊（中央大学名誉教授）

閉会の辞：日本ギaskell協会副会長 大島 一彦（早稲田大学教授）



（撮影：松岡光治）

シンポジウム 「ギaskell中・短編小説の魅力 ——『没後 150 周年記念論文集』を語る」

「ギaskell中・短編小説の魅力 ——『没後 150 周年記念論文集』を語る」と題するシンポジウムの司会兼講師を務める。名誉教授のヴェテランから新進気鋭の若手研究者まで、合計 7 名の講師による各自の論文概要の発表は、聴衆に知的刺激を与えるに十分な内容であり、質疑応答時には、時間が足りなくなるほど活発な意見交換がなされた。

（大野 龍浩）

「コーパス文体論によるギaskell短編作品の解析 —— そのキリスト教性について」

52 短編について、コーパス文体論の援用により、全体構造を客観化する。

トピック・モデリングの仕組みを説明後、分析結果として、以下 2 点を紹介。①主要トピックには“time” “day” “house” “father” “mother” などの単語が高頻度で含まれるため、「時間の中の家族関係」が描写される傾向にある。②“god”を含むトピックに注目した場合、“child” “dead” “heart” “words” “father” “eyes” “life”などを同時に含む傾向が高いため、神への言及は、家族、肉体の部位、死を背景になされる蓋然性が高い。

電子テキストを利用して、作品全体を鳥瞰する「デジタル人文学」の手法を文学研究に援用すると、伝統的主観批評では見えない構造が明らかになる。

（大野 龍浩）

「ジョアンヌ・シャトック著「書評家としてのエリザベス・ギaskell」」

拙訳の本論文は、ギaskellの書評の仕事に焦点を絞り、長編小説の創作との相関関係、ならびにジャンル横断的な作家としての側面と力量を詳らかにする。書評の仕事から垣間見えるのは、彼女の語学力、外国文化・文学への幅広い知識、そしてウィットであろう。さらに、最後の書評として知られる W. T. M. Torrens 著の *Lancashire's Lesson* (1864) の書評は、貧困問題に対する国家の責任を力強い筆致で訴える。新たに発掘されたギaskellの筆とされる書評の分析とともに、書評を含めたノンフィクション作品は、今後のギaskell研究の可能性を開くに違いないのである。

（市川千恵子）

「ハリソン先生の打ち明け話」にみる老いと若きと ——『克蘭フォード』にいたる老いの表象 ——」

本短編（1851）は架空の寒村ダンカムに暮らす独居老人たちの喜劇である。当時、老女が嫌悪されたのは社会的弊害のスケープゴートとしての魔女の要素が窺われたからだ。筋として①新旧医者・医学の対比（新しい技術の勝利）と②（ハリソンに夢中な）中高年女性対（これらを愛情対象外とする）独身男性の対比が挙げられよう。当時の女性の結婚事情を考察した上で、成就できない恋愛と痛みを抱え、静かに耐える悲しみの老いの人生を描く次作『克蘭フォード』と比較し、さらにピーターの謎を絡めつつ、二作品間での進化の過程を読み解こうとした。（石塚 裕子）

「『本当なら奇妙』におけるサロン空間」

「『本当なら奇妙』でド・レ夫人が主催するパーティーは無目的な集りではなく、適格な人選がなされたフランスの伝統的な文学サロンである。そこでギャスケルが執筆したエッセイ「おもてなしの仕方」を参照し、光・食事・ゲームの3点に関して夫人がいかに快適なサロン空間を実現しているのかを分析した。またユーモアを好むイギリス人とエスプリを重視するフランス人との会話における差異、さらには物語の結末で自然空間にひとり存在するイギリス人に注目し、賑やかな社交とは相反する孤独を愛しむ別の価値観が示されていることを指摘した。（桐山 恵子）

「『ラドロー卿の奥様』と歴史小説の伝統」

本シンポジウムでは、歴史小説『ラドロー卿の奥様』（*My Lady Ludlow*, 1858）を取り上げ、この作品には、シドニー・オーエンソン（Sydney Owenson）によってロマン主義時代に構築された歴史小説の枠組み、プロット、テーマなどが換骨奪胎して取り入れられていることを検証した。結局、ギャスケルはこの作品において、ユニテアリアンの立場から、階級的寛容、宗教的寛容、純正よりは混交、雑種こそがこれからのイギリス社会の望ましき姿であるということを訴えようとしたのである、ということをも指摘した。（鈴木美津子）

「『マーサ・プレストン』と「一時代前の物語」—— 看護による「自立」と「共生」——」

「『マーサ・プレストン』と「一時代前の物語」は同じプロットを元にしており、各2回ずつ看護場面が登場するが、「一時代前の物語」では物語の結末、殊に第2の看護場面以降が大幅に書き換えられ、ヒロインの人生も大きく異なる。本論ではなぜギャスケルが前作を改稿して「一時代前の物語」の結末を劇的に変えたのかという点につき、両作品の看護場面を中心に比較・分析した。その結果、典型的スピンスター物語から女性同士の共生へとつながる物語の書き換えが「看護」という要素の介在ゆえに成立したからなのではないかと考えられる。（西垣 佐理）

「『ジョン・ミドルトンの心』における「赦し」」

小説の構成要素は「テーマ」と「手法」とあるという考えを基に、「ジョン・ミドルトンの心」のテーマは加害者への被害者の「赦し」であり、その具現化のために作者ギャスケルはジョンに「視点」を置き、妻となるネリーとの出来事や彼の人生行路を邪魔するリチャードへの憎しみを語らせ、これを「筋」とし、彼の心の動き、中でも真の信仰を悟っていく過程を「朝日の陰」にいた彼が最後には朝日が差そうとしている「穏やかな朝靄の中」でリチャードを赦すメタファー等で表し、「赦し」はイエスの教える愛の一つであり、本短編が優れた信仰物語であると解明した。（足立万寿子）

講演：「Press-gang をめぐって：Mrs Gaskell と Mr Hardy」

ギャスケルの『シルヴィアの恋人たち』とハーディの『トランペット隊長』はともに press-gang を題材にしているが、その扱い方はまったく異なっていると深澤氏は指摘する。ギャスケルの作品では press-gang が無機質で人々が反抗すべきものとして描かれている一方で、ハーディが描く南部の人々は北部の人々よりも従順に徴兵制を受け止めていた。ギャスケルはフィリップという新しい人間を受け入れさせるために press-gang という設定を使ったが、結局シルヴィアは新しい時代に順応できないまま話は終わる。つまりディケンズが常套手段でよく使ったように、登場人物を外国に行かせてしまうという結末はギャスケル自身がこの press-gang の問題を十分に処理しきれていないということの証である。ハーディの作品と比べることで、ギャスケルの作品の問題点がより明らかにされ示唆に富む講演であった。（文責 芦澤 久江）

「大会に参加して」

当日は爽やかな秋晴れの天候に恵まれ、会場となった名古屋大学に39名の参加者を迎え、第27回大会が開催された。今回はギャスケル没後150周年記念大会として、シンポジウムは「ギャスケル中・短編小説の魅力—『没後150年記念論文集』を語る」というテーマで行なわれた。記念論文集の構成に合わせ、市川先生、大野先生、石塚先生、桐山先生、鈴木先生、西垣先生、足立先生の7名の講師が、それぞれの視点でギャスケルの中・短編小説の魅力を紹介して下さった。海外の研究者の寄稿論文、頻出する単語群、「古い」、サロン空間、異郷への旅、看護、象徴的な自然描写などその着眼点は様々で、ギャスケル作品の多様性を改めて実感することができた。

深澤俊先生の講演「Press-gang をめぐって：Mrs Gaskell と Mr Hardy」は、press-gang をキーワードに、*Sylvia's Lovers* とハーディの *The Trumpet-Major* を登場人物の相関関係やあらすじを含め比較、対照することにより、両者の違いを浮き彫りにするという大変興味深い内容であった。

大会後の懇親会には30名が参加し、「ひつまぶし」や「きしめん」など名古屋名物を囲んで和やかなひと時を楽しんだ。（岡山県立大学教授 杉村 藍）

日本ギaskell協会役員会報告

1 役員会報告

1) 平成 27 年度第一回役員会 (6 月 6 日 (土) 12 時～13 時、於 静岡市産学交流センター (ペガサート) 7 階 演習室 3)

①幹事の組織と役割分担について

市川事務局長、関口幹事、玉井幹事がそれぞれ今期で任期満了となる。

②講演の講師料について

講演者への謝礼を、現職者と退職者では別とする。

③HP における論文の公開について

創刊号から 12 号までの『ギaskell論集』掲載論文を HP に公開するにあたり、執筆者への確認は事務局長が年内に行う。ただし、すでに退会、もしくは死亡した執筆者の論文については公開しないこととする。

④年会費について

平成 26 年度の総会において、年会費の金額設定について広く会員にも意見を募ったが、特に寄せられなかった。19 世紀関連の他学会においても、一般と学生の区別はあるが、さらに一般の中で非常勤と専任とで段階制を設けているところはない。したがって、非常勤講師会員から特に希望がない限り、年会費については当面現状維持することとなった。

2) 平成 27 年度第二回役員会 (10 月 3 日 (土) 11 時～12 時 20 分、於 名古屋大学文系総合館 705 号室)

①平成 28 年度幹事の新体制と役割分担について

第 13 期ならびに 14 期の役員の任期が平成 28 年 3 月で満期終了となり、現役員の市川事務局長、関口幹事、玉井幹事の 3 名と会計監査 (任期 2 年) の志渡岡氏、松村氏が満期を迎える。これに伴い新しい役員 5 名 (幹事 3 名、会計監査 2 名) を迎え、また一部役割分担を変更する。新役員ならびに役割分担の変更は次の通りである。事務局長: 石塚裕子、事務局補佐: 小田夕香理 (会計と兼務)、例会・大会準備委員: 松岡光治 (HP 管理と兼務)、Newsletter 編集委員: 芦澤久江、会計: 小田夕香理、『ギaskell論集』編集委員: 木村晶子、HP 管理: 大前義幸、創立 30 周年記念 (仮称) 委員長: 大野龍浩 (敬称略)。

②平成 28 年度例会と大会の日程、プログラム、会場について

例会: 平成 28 年 6 月 4 日 (土) 熊本大学、講演 (金子幸男先生)、研究発表者 2 名を予定。

大会: 平成 28 年 10 月 1 日 (土) 東北大学東京分室、講演 (阿部公彦先生)、シンポジウム (司会: 松村豊子先生) を予定。

③協会創立 30 周年記念について

協会の創立 30 周年記念の企画を検討し、次の 2 案に絞られた。A. 時代性に着目するなど、一定のテーマを設定した論文集を単行本として刊行する。B. 『ギaskell論集』を特集号として発行する。

④英国協会会費

英国協会の会費 30 ポンドを現在 5,500 円で徴収しているが、レートの関係で赤字になっている。しかし、為替の変動が激しく予測が難しいため、平成 28 年 4 月時点のレートで見極めることとする。

⑤『ギaskell論集』の書評は従来 HP 上で公開されていないが、論文に準じて公開することとする。これに伴い、「書評も論文に準ずる」ことを総会、および「ニューズレター」で告知する。

2 総会報告

①平成 28 年度の幹事の組織について

鈴木美津子会長より平成 28 年度の幹事の新体制と役割分担について説明があった。詳細は上記第二回役員会報告の①の通り。

②年会費の段階制について

平成 26 年度の総会にて意見を募り、さらに他学会の状況を調べた結果、学生と一般の区別のほかに、年会費の段階制は設けないことになった。

③英国協会会費について

英国協会会費の額は、4 月時点のレートにより設定することになった。

④『ギaskell論集』掲載の書評について

書評も論文に準じて、HP に掲載することになった。

⑤協会創立 30 周年について

役員会では協会創立 30 周年記念の企画を検討し、2 案 (一定のテーマを設定した論文集の出版、あるいは『ギaskell論集』での特集) が出たことを報告し、事務局へ意見等を寄せていただくこととした。

(文責 市川千恵子)

事務局報告（平成26年度）

平成26年度日本ギヤスケル協会会計報告（2014年4月1日～2015年3月31日）

平成26年度一般会計予算案

収入		支出	
前年度繰越金	900,265	大会費	150,000
年会費	500,000	例会費	200,000
（英国協会費を含む）		印刷費	200,000
懇親会会費	160,000	通信費	40,000
		事務費	30,000
		英国協会費	145,000
		研究会会場費	18,000
		書評対象書籍代	20,000
		次年度繰越金	757,265
合計	1,560,265	合計	1,560,265

平成26年度一般会計決算

収入		支出	
前年度繰越金	900,265	大会費	199,903
年会費収入	518,410	例会費	242,865
【内訳】		印刷費	135,000
当協会	414,000	通信費	47,442
英国協会	112,000	事務費	82,594
（一）振込手数料	7,590	英国協会費	140,518
懇親会収入	209,940	研究会会場費	18,000
【内訳】		書評対象書籍代	16,227
例会	86,500	次年度繰越金	746,066
大会	125,000		
（一）振込手数料	1,560		
合計	1,628,615	合計	1,628,615

平成27年度日本ギヤスケル協会予算案（2015年4月1日～2016年3月31日）

平成27年度一般会計予算案

収入		支出	
前年度繰越金	746,066	大会費	150,000
年会費（含 英国協会）	500,000	例会費	150,000
懇親会会費	160,000	印刷費	150,000
		通信費	40,000
		事務費	30,000
		英国協会費	145,000
		研究会会場費	10,000
		書評対象書籍代	20,000
		次年度繰越金	711,066
合計	1,406,066	合計	1,406,066

会 計 市 川 千恵子
関 口 章 子

会計監査 松 村 豊 子
志渡岡 理 恵

◆◆◆◆◆日本ガスケル協会 第28回例会の御案内◆◆◆◆◆

日 時：平成28年6月4日（土）午後2時から 会場：岐阜県立看護大学講義棟・講義室201

研究発表 司会：宮丸裕二（中央大学教授）

1. 「ガスケル作品における子どものイメージ——『ルース』を中心に」

瀧川 宏樹（近畿大学非常勤講師）

2. 「女性が伝える物語——「ばあやの物語」と『嵐が丘』」

石井明日香（東京学芸大学非常勤講師）

講演 司会：杉村 藍（岡山県立大学教授）

「カントリーハウスにみるホームの変遷——ガスケル、ハーディ、フォースターとイングリッシュネス」

金子 幸男（西南大学教授）

◆◆◆◆◆日本ガスケル協会 第28回大会 予告◆◆◆◆◆

日 時：平成28年10月1日（土）午後1時から 会場：東北大学 東京分室（東京駅 サピアタワー）

シンポジウム「モダンの萌芽を探して——女性、労働、ホーム」（仮題）

司会・講師 松村 豊子（江戸川大学教授）

講師 池田 晶子（江戸川大学客員教授）

講師 鈴木 哲平（江戸川大学専任講師）

講師 松永 典子（帝京大学専任講師）

講演 司会：松本三枝子（愛知県立大学教授）

「小説家の礼儀作法」 阿部 公彦（東京大学准教授）

研究発表を募集しております。お申込みは12月末日までに事務局へメールにてお願い申し上げます。

◆◆◆◆◆研究会予定◆◆◆◆◆

ガスケルの中編、短編小説の読後感を自由に語り合い、鑑賞する研究会です。

今年度も以下のような作品を取り上げます。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

作品：平成28年	5月	“The Half-Brothers”	(1856)
	7月	<i>Lois the Witch</i>	(1859)
	9月	“The Crooked Branch”	(1859)
	11月	“Curious if True”	(1860)
平成29年	1月	<i>The Grey Woman</i>	(1861)
	3月	“Six Weeks at Heppenheim”	(1862)

日 時：奇数月 第2日曜日 午後2時～午後4時

会 場：実践女子学園桜会館（東京都渋谷区東1-1-40、tel: 03-3407-7459）

JR 渋谷駅東口より徒歩7分。渋谷警察署脇の六本木通り、首都高速に沿って坂を上る。一つ目の信号を渡り、住友不動産ビル裏に向かう細い道を右折、右手の建物。

参加費：200円（会場使用料として）

日時、会場の変更がある場合は日本ガスケル協会 HP に掲載しますので、新着情報でお確かめください。

（多比羅 眞理子）

●●●●●編集後記●●●●●

今回から編集を担当させて頂くことになりました。

これまで皆さまが培ってこられた協会の重要な役割を引き継ぐことになり、今さらながら責任の重大さを感じております。お忙しいなか、玉稿をお寄せ頂きました皆さま、引き継ぎの際に懇切丁寧に教えて下さった小田夕香理先生、事務局からのさまざまな報告記事をお寄せ頂きました市川千恵子先生には心から感謝いたします。またこのような機会を与えて下さった鈴木美津子先生には心よりお礼申し上げます。精一杯努力いたしますので、よろしくお願いいたします。

（編集 芦澤久江）

発 行：日本ガスケル協会

〒657-8501

神戸市灘区鶴甲1-2-1

神戸大学大学院国際文化科学研究科

石塚裕子研究室

URL: <http://www.gaskell.jp>

e-mail: secretariat@gaskell.jp

発行日：2016年5月1日